卒業製作

文芸アイドル　わせぶんに

きらいな本は　そんなない

早稲田文芸会

で割と辟易されているのだ。代わりに川上が、

「ル・パーン」

と言い、深沢と荒木が笑う。おかしなやつらだ。洒落乙な藤枝が覚醒剤パーティーのうわさを始めた。おとといの夕食を思い出そうとするかのような、あるいは使いこなせないフランス語を知ったかぶっているような調子は、単に高校時代の思い出を年月がもたらした感傷の麻痺みたいなユーモアを込めて語るよりも頑なに《あのころの絆》を突き詰めてくるものであった。退いてしまいながら興味深げにあいづちを打つ者、法学部卒だてらに逮捕された場合の懲役を語る者、われ関せずとばかりに極楽町と自分の彼女へ思いをはせる者がいた。やがて夜も更けて佐伯さんが三度目の小便へ立つと藤枝がついてきて小声で語りかけるのだった。

「さっきの話のあれなんだけど、どうだ、やってみない？」

「いいえ」

五ページ目は文章ではなく絵で覆った。ボールペンで描いたわたしたちの高校だ。なんの変哲もない校舎とグラウンド、できばえは中の上といった感じでたいだいが5であった美術の成績を踏まえると満足がいかない。けれどしかたない思いもある。細かく字も汚いからこそ注視してしまう彼の記述を見えなくするためにふだんなら必要ない線までも描き込まなければならなかった。かつて彼はわたしが大学の授業中に何気なく教材プリントへスケッチした教授のバストアップをほめてくれたことがある。

は典型的な媚態、欲情の記号であると学んだ[6]。だからあなたに出会ったときすぐにわかったのだ。校庭のかたすみで画いていたスケッチを突然のぞきこんできたあなたを見るなり、この人はわたしと同じだと感じることができたのだ。

「どこにでもあるし、だれにでもあるんだよ」

そんなことはわかっている！

とにかくあなたはただ視線をなんらの意味もなくまたなにか特別ものを見ているというのでもなく扱っていた、注視するくせにまったくディテールを追っていないのがみえみえ、ファナティックではあるが描線などまったく見ていなかった、けれどそれは対象へ自己を投影し所有する類ではなかった。そしてそれでよかったのだ。わたしたちは特別なふたりになりようがなくて、だからこそありきたりに特別であろうとふるまえばよかった。ケンカをしても愛し合っても、ほんとうに薄い粘着質の膜で繋がっていてあるいはそれが邪魔になってひとつになることは絶対になくて、どこにでもいるどこだかにいるらしいかけがえないのない他人どうしだった。

いま机にはこれを書いているパソコンのほか、コーヒーの空き缶がある。その手前に使用済みの生理用品を入れた茶碗がある。ほこりをかぶったアイポッド、血にまみれてところどころページが張り付いて開かないノート、一〇〇円ライターが三つ、ピースライトが二本、あなたの部屋の鍵、燃え尽きたマッチがある。正面の壁にはあなたを画いたのスケッチがセロテープで貼られている。口だけは空白。微笑みのかたちにくり抜いたのだ。大丈夫、あなたはこういう顔をしていた。

6　学びとはいっぱいいっぱい麻痺していくこと、と思っていました。ちがうのにね。

背後ではミスブランチが餌を食べている。棚の上の水槽のなかでゆるゆる動いて活発ではない。あまりわたしを見ない。顔を寄せても尾を向けられてしまう。

もうすぐ朝倉さんが来る。掃除したほうがいいかな。

脇をかいでみる。かなりくさい。

エレベーターが止まり、酒類とつまみの入った袋を片手に朝倉氏は歩き出す。もともと細い目と耳と口をさらにきりっと引き締めて緊張しているのかもしれなかったけれど、ひげのつるつるに剃り上げられたあごがどちらかといえば期待感をあらわにしていると思いたければ思ってもよかった。五〇七号室、宮下さんの部屋の前[7]で立ち止まり、ふうっと息をついてインターフォンを押す。

「はい」

「ちっす」

「ああ」

ぼくはこの、機械で少しバイアスのかかった「はい」と「ああ」が好きで、買い出しから帰ってきた際にもしばしばピンポンしたものだった。なんで？　と問われてもほんとうのことを言ってしまうとうざがられるのが嫌で首をひねりながらだってあれじゃん、みたいにごまかすのも楽しかった。宮下さんが出てくる。珍しく髪をポニーテールにまとめている。身体からさわやかにバラのにおいがた

7　扉には白いカーネーションの造花が飾られている。

だよってくるのだ。
彼女の部屋は典型的な1Kの間取りで、居間に入ってすぐ右にノーパソを乗せたデスク、中央にはこたつ、左に小さな本棚とラックがならび、その上に金魚鉢があってミスブランチが泳いでいる。壁にはミュシャのポスターが額に入れて飾ってあり、ベッドはいちばん奥でこれを乗りこえなければベランダに出られないのだった。とりわけぼくを思わせるものはもうない。宮下さんの後ろからそれらをすべて確認した後、朝倉氏は、
「おお、ミスブランチだね」
と言う。
「そうだよ、かわいくない？」
と宮下さんが答える。
「かわいいね。はじめまして。朝倉久志といいます」

ピンポーン。実家住まいのときは別室にいる母が気づくのかどうか心配するほど頼りなげだったのに、いまでは鳴るたびにビクッとしてしまうほど大きく感じるな、とか思っていたらまた鳴る。センター試験の出題傾向について熱弁をふるっていた朝倉さんが口を閉ざし、タオルケットにくるまる。それでも見つめていると、
「出なよ」
と言う。

「うん」
パンツとシャツ、ジャージを身につけてわたしは受話器を取る。

「はい」
「ぼくです」
「ああ」
もう真夜中だというのにいつもどおり迎えてくれる宮下さんに感謝しながら部屋に入ると、すぐ右にあるベッド近くの床にブランデーの瓶とコップ、灰皿には火の付いたままのハイライトが置かれている。
「ちゃんと消さないと危ないじゃないか」
「あ、ちょっと、ん？」
アルコールのにおいがただよってくる。ぼくもけっこう飲んできた自覚はあるけれどこれは彼女もかなりやっていたようだな、無理に諭すとまたこじれてしまうかもしれない、と思って敷き布団の上に伏せてあった本へ目をやると前に貸したまま放っておかれていた小説だったから、脱いだジャケットをたたみつつさりげない調子で、
「これどう、面白い？」
と言ってみる。なんだかムーディーな雰囲気だ。
「なに、それ」